

# 常なる磐

つねなる いわ season II

令和 4年 1月21日(金)

その3

## ◇ 【きょうどう】的に 学ぶこと

文部科学省が学習指導要領に掲げる

「個別最適な学び」と「**きょうどう**的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた……

さて、**きょうどう**には、【共同】【協同】【協働】のうちどれがあてはまるか。

以前勤務していた学校の教育研究で「協同学習」をメインテーマにしていた経験から、てっきり「協同」かと思ったら、おお間違い。正解は【協働】である。

今回は、【きょうどう】の話。

まず、「きょうどう」の漢字を調べると、【共同】【協同】【協働】はあるが、【共働】はなかなかヒットしない。≡【協働】の捉えだが、なじみが浅く、使用頻度も低い。

そこで今回は、未だにどの漢字を使うのかを迷う【共同】【協同】【協働】の三語の使い分けについて述べていくことにする。

三語の意味と使い分けをざっと述べると、以下のとおりだ。

◇三語に共通する意味合い：複数の人や団体が事にあたること

【共同】：**力**を合わせて事を行うという意味のほか、「共同トイレ」のように同じ条件や資格で結合したり、関係したりするといった意味を有す。

【協同】：**心**と**力**を合わせて物事を行う意味があり、「協同組合」のように、「互いに協力する」といった精神面を強調する際に用いられることが多い。

【協働】：同じ目的に向かって**心**と**力**を合わせて物事を行うという意味では【協同】と同じだが、「協同」は役割分担などが事前に決まっていることが多いのに対し、【協働】は、それぞれができること、得意分野のことをする場合に用いられることが多い。

また、「協同」【協働】のどちらも一緒に行動するとは限らないが、「協同」よりも【協働】の方が、より一緒に行動するという意味合いが強い。

表面の分類をすれば、学習指導要領に【協働】が用いられた意図が理解できる。

学習指導要領を読み解くと、「一人一人の児童が、①自分のよさや可能性を認識するとともに、②あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、③多様な人々と【協働】しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いて持続可能な社会の創り手・担い手となる礎を築くこと」が学校に求められている。

このことを冒頭の部分の抜き出しと照らし合わせると、めざす児童像を具現化させた児童の学びの姿が「主体的・④対話的で深い学び」であり、具現化するための手だてが「個別最適な学び」や「協働的な学び」というわけだ。

上の□をかみ砕いてみよう。

まず、【協働】で忘れてはならないことは、表面に記した【協働】の定義前半部分の【複数人間が同じ目的に向かって心と力<sup>おもてめん</sup>を合わせて】という大前提だ。「協働的な学び」となれば、児童たちが共有する目的は、「授業の学習課題の解決」。この目標達成に向けて、児童がクラスメイトとともに同じ方向を向いた心と力<sup>おもてめん</sup>を合わせて対峙する。そして挑む。これこそが「協働的な学び」の目に見える姿だ。

さらに、「協働的な学び」の最重要要素が、身近な他の存在(≒クラスメイト)である。

①自分のよさや可能性を認識するには、他の存在(クラスメイトの存在)が不可欠だ。なぜなら、自身の一人調べよりもはるかに他者からの称賛や賛同、価値付けによって認識することが多い。このことは、敢えて言うまでもなからう。

②あらゆる他者を価値のある存在として尊重するには、他者を知ることが不可欠だ。他者を知るには、他者の考えを聞き、真摯に受け止める。他者に敬意を払うこの真摯な受け止めが、他者の尊重へとつながる。

③多様な人々と【協働】は、いつも同じメンバーではない他者との関わりがポイントとなる。気心の知れた者だけの集まりが、「協働的な学び」を有効にする最適な集まりではない。あっと驚く発見は、むしろそうでない場合や場面の方が、圧倒的に多い。

④対話的で深い学びは、「深い学び」とするには、他者との対話が必要であり、対話が主体的になればなお、効果を増す。なぜなら、主体的な行動には強い根拠が存在し、根拠を支えるプラス・マイナス両面の体験・習得した技術・積み重ねた知識などが他者のかかわりによって大きく揺さぶられる。これが、新たな価値観を生むのだ。

よって、絶妙に絡み合う「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び※別項で対応」「協働的な学び」の三つの学び方を児童に身に付けさせることで、他者からのプラスの刺激により、それぞれが各々の学びの力を高めつつ、支え合うことで、児童の豊かな人生と持続発展可能な社会の担い手としての基盤を築いていく。だから、【協働】なのである。